

赤穂城を歩いてみよう!

赤穂城

史跡名勝の探訪ガイド

赤穂城の沿革

赤穂城は、正保2年(1645)に常陸国笠間(現在の茨城県笠間市)から石高53,500石で入封した浅野長直が、近藤三郎左衛門正純に築城設計を命じ、慶安元年(1648)から寛文元年(1661)まで13年を費やして完成させた城である。その縄張は甲州流軍学によってなされたといわれ、本丸と二之丸は輪郭式に、二之丸と三之丸は梯郭式に配置し、櫓10箇所、門12箇所、枡形5箇所を設けて防備の要としている。城は、熊見川(現千種川)が形成した三角州の先端に立地しているため、典型的な平城であり、また往時は二之丸の南半分と三之丸の西側が瀬戸内海に面していたので、海城であったことも大きな特徴である。

この城を築城した浅野家は、元禄14年(1701)の江戸城中の刃傷事件によって断絶し、その後は永井家を経て森家の居城となって、明治の廃藩置県を迎えた。廃藩後に城郭建物も順次取り壊され、城内の大部分は田畑や宅地となり城郭遺構もかなり改変を受けたが、昭和46年(1971)には国史跡に指定され、以後計画的に公有化と整備が進められている。また、本丸及び二之丸において池泉を備えた庭園が発掘されており、江戸時代初期の大名庭園「旧赤穂城庭園」として平成14年(2002)に国名勝に指定されている。

①本丸門

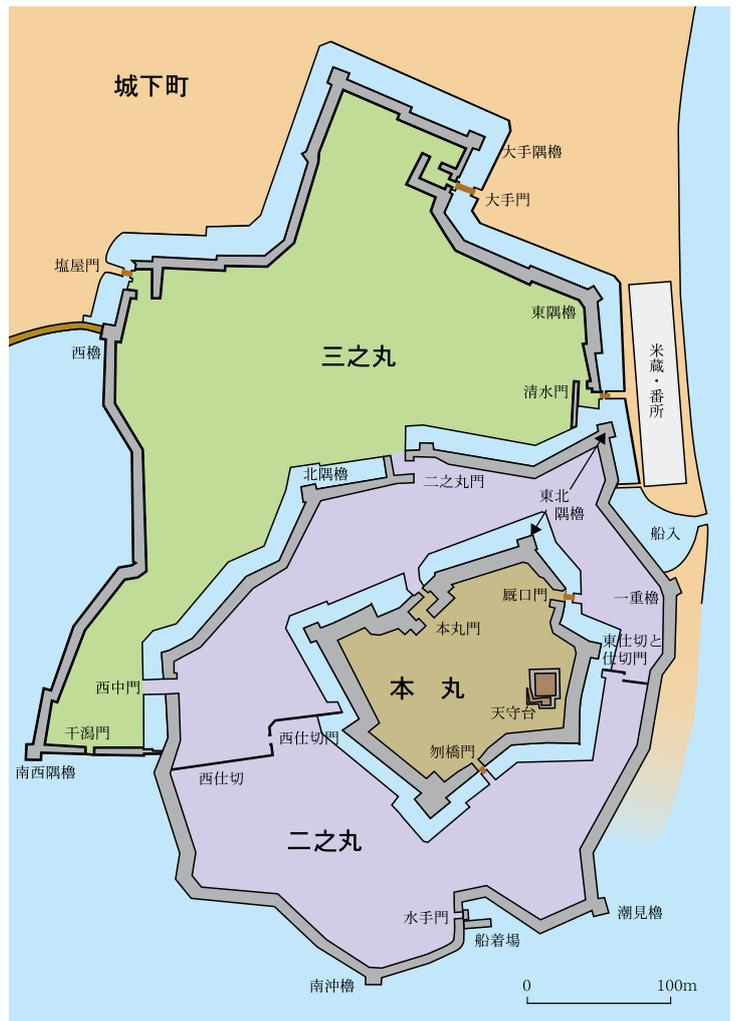
本丸の表玄関となる本丸門は長方形の内枡形を備え、高麗門と櫓門の2門から構成されている。この本丸門は廃城後に取り壊されていたが、発掘調査成果・絵図・古写真等の資料をもとにして平成4～8年(1992～1996)にかけて復元された。一の門(櫓門)



①本丸門



②本丸御殿(間取り復元)



赤穂城の縄張模式図



④大池泉



⑤中奥坪庭



⑦天守台



⑧厩口門



⑨刎橋門跡

は木造本瓦葺の入母屋造りで桁行7間、梁行2間半、建坪23坪、二の門(高麗門)は木造本瓦葺の切妻造りで正面幅2間2分、建坪6坪の規模を持ち、枳形石垣とともに壮大な虎口を構成している。

②本丸御殿

本丸内の大部分は藩邸である御殿が占めていた。御殿は表・中奥・奥から構成され、表御殿は政務を行う公的な場、中奥は藩主の私的な場、奥は女中達の部屋として使用された。発掘調査では御殿の遺構はほとんど検出されなかったが、東京大学史料編さん所に保管されていた永井家文書の中に御殿の間取り図が発見され、往時の御殿の様子をうかがうことができた。この間取り図をもとにして平成元年(1989)に御殿の間取り復元がなされている。御殿の他には森時代の小姓部屋があった場所に休憩舎を、蔵があった場所に便所を設置している。

③本丸庭園

本丸庭園は、本丸内に造られた池泉を中心とした庭園で、御殿南面の大池泉、中奥坪庭の小池泉、本丸北西隅の池泉がある。いずれも発掘調査で検出された池泉遺構であるが、現在は修復整備がなされ、御殿間取り復元とともに往時の庭園景観が再現されている。平成14年(2002)9月20日に「旧赤穂城庭園」として国の名勝に指定された。

④大池泉

表御殿の南面にある池泉で、発掘調査によって極めて良好な状態で検出された。池には中島・入江・岬をしつらえ、護岸汀線は直線・曲線を巧みに組み合わせ、池の底には割石・砂利石・瓦を幾何学的に敷き詰めるなど趣のある造形を持っている。発掘調査や絵図から、池泉は浅野家時代に造られたものを森家時代に改修したことが判明しているが、現在はその変遷がわかる形で整備されている。復元された池は東西38m、南北26m、外周約150mの規模を持ち藩邸の庭園にふさわしい力強い池泉となっている。

⑤中奥坪庭

中奥坪庭の小池泉は、流れの池泉と舟形の池泉という並列した二つの池泉から構成され、池泉の南側護岸は漆喰に玉石を配した霰こぼし状の特徴ある仕上げとなっている。

⑥北西隅のくつろぎ池泉

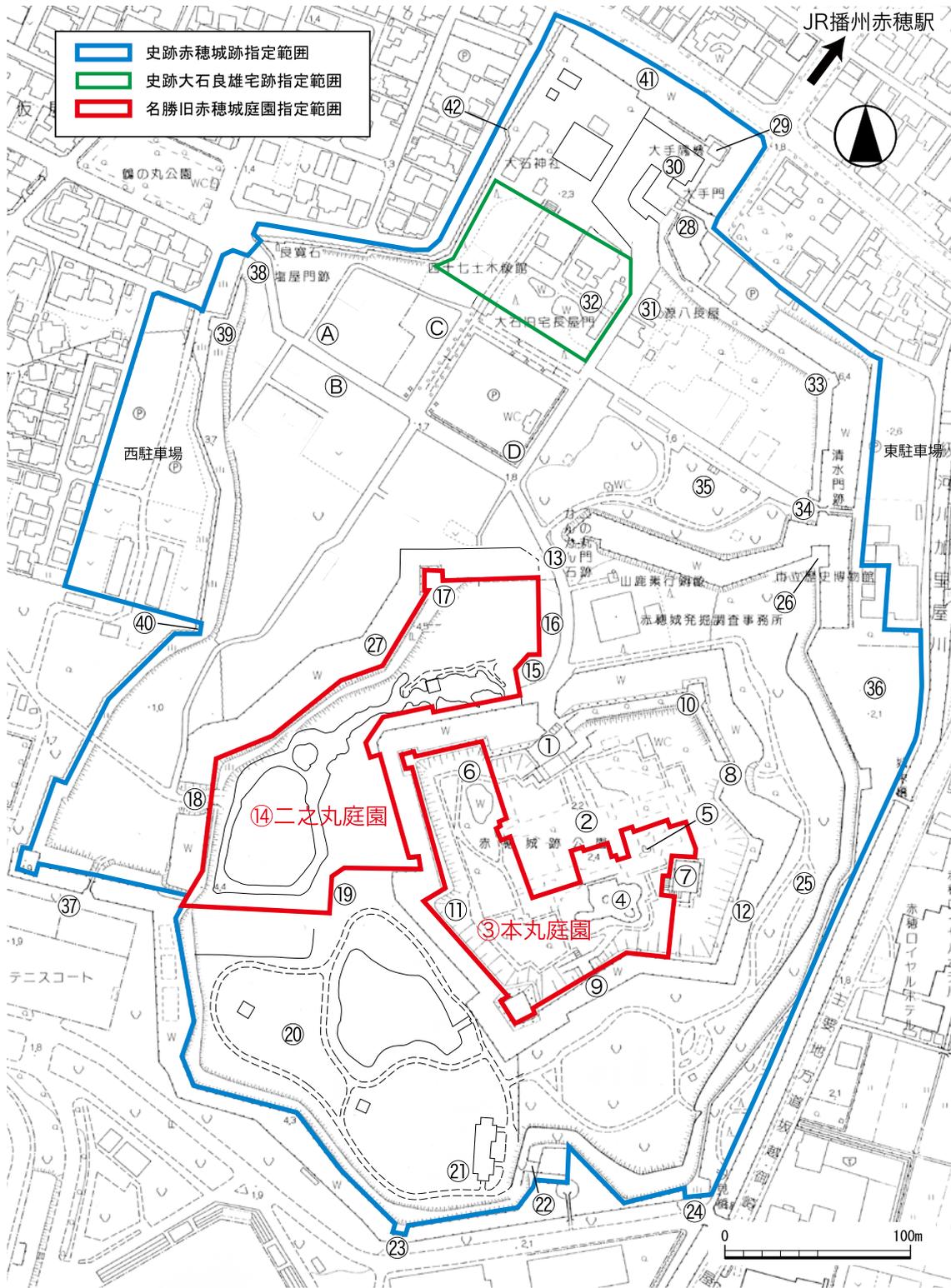
古絵図では「くつろぎ」と記され竹林が描かれているにすぎなかったが、平成元年(1989)の発掘調査によって池泉跡が発見された。池泉跡からは多数の陶磁器類や木製品が出土したが、なかでも「浅野内匠頭」「大石内蔵助」など歴史上の人物名が記された木簡が注目される。これらの木簡の一部は赤穂市立歴史博物館に展示されている。

⑦天守台

本丸南東部には天守台が独立して築かれているが、天守は当初から建造されなかった。赤穂城では最も高い石垣が築かれており、その高さは約9mを測る。昭和12年(1937)に隅角部の崩落が修復されたほか、昭和60年(1985)に天守台の登り階段が修復整備された。

⑧厩口門

浅野家時代には厩口門、森家時代には台所門と呼称されていた。廃城後に失われ、後には県立赤穂高校の通用門として改変されていた。平成8年(1996)に実施した発掘調査によって門礎石等が良好な状態



- | | | | |
|-------------|-------------|---------------|-------------|
| ①本丸門 | ⑬二之丸門跡 | ⑲東仕切門跡 | ⑳干潟門跡・西南隅櫓台 |
| ②本丸御殿 | ⑭二之丸庭園 | ⑳二之丸東北隅櫓台 | ㉑塩屋門跡 |
| ③本丸庭園 | ⑮二之丸庭園表門 | ㉑二之丸外堀 | ㉒西隅櫓台 |
| ④大池泉 | ⑯大石頼母助屋敷門 | ㉒大手門 | ㉓樋門 |
| ⑤中奥坪庭 | ⑰北隅櫓台 | ㉓大手隅櫓 | ㉔三之丸外堀 |
| ⑥北西隅のくつろぎ池泉 | ⑱西中門跡 | ㉔大手門枅形と番所跡休憩所 | ㉕三之丸石垣の屏風折 |
| ⑦天守台 | ⑲西仕切と西仕切門 | ㉕近藤源八宅跡長屋門 | 義士宅跡石標 |
| ⑧厩口門 | ⑳花見広場(元禄桜苑) | ㉖大石良雄宅跡長屋門 | ㉖間瀬久太夫 |
| ⑨刎橋門跡 | ㉑米蔵跡休憩所 | ㉖三之丸東隅櫓台 | ㉗磯貝十郎左衛門 |
| ⑩本丸東北隅櫓台 | ㉒水手門跡 | ㉗清水門跡 | ㉘大石瀬左衛門 |
| ⑪本丸西面石垣の横矢 | ㉒南沖櫓台 | ㉘武家屋敷公園 | ㉙片岡源五右衛門 |
| ⑫本丸外堀 | ㉒潮見櫓台 | ㉙船入跡 | |



⑩本丸東北隅櫓台



⑪本丸西面石垣の横矢



⑫本丸外堀



⑬二之丸門（古写真） 原版：花岳寺蔵



⑭二之丸庭園

で検出され、高麗門であったことが判明した。平成13年(2001)に門、橋、土堀及び周辺石垣が整備され、往時の姿を取り戻している。

⑨ 勿橋門跡

本丸の南面、藩邸の裏手にあたる門で、非常門とも不浄門とも伝えられる。建坪5坪の小門で、ここから二之丸へ閉閉式の勿橋が架けられていた。『赤穂加里屋城図』によると、勿橋部分は渡り2間2尺、幅1間九尺と記されている。また「赤穂城本丸内水筋図」にはこの門の内側に石積みの構築物が描かれていたが、発掘調査の結果、土塁内側の腰巻き石垣と合坂からなる通路となっていたことが判明した。平成9年(1997)に石垣・合坂などの復元整備がなされた。

⑩ 本丸東北隅櫓台

本丸にあった唯一の隅櫓で、東西4間2尺、南北3間4尺2寸の基底部を持つ二重櫓であった。明治初期撮影の本丸門の古写真にかすかにこの櫓が写っており、往時の姿をかるうじてうかがうことができる。現在は礎石も失われているが、櫓台に登る石段の一部が残存している。このほか本丸には西北隅・西南隅・厩口門南に櫓台状の石垣があるが、いずれも櫓は築かれず横矢枱形として配されている。

⑪ 本丸西面石垣の横矢

赤穂城の城壁には軍学手法が網羅的に採用されたため、様々な折れによる横矢が随所に見られ、赤穂城の大きな特徴のひとつとなっている。特に本丸西側の城壁は途中大きく屈折して、屏風折ともいふべき鋭角な折れをなしており、城壁に取り付く敵への側面攻撃に配慮した縄張となっている。

⑫ 本丸外堀

本丸を取り巻く堀であるが本丸門の中道部分は途切れている。発掘調査によると、堀の底はほぼ平坦でその深さは1.5m内外と比較的浅い。廃城後埋め立てられ田畑として利用されたが、昭和28年(1953)以降順次復元され、平成10年(1998)に堀全周の整備が完了した。

⑬ 二之丸門跡

虎口は二之丸城壁からやや引き込まれ、西方に開く櫓門1門のみで構成されていた。虎口の設計にあたっては、山鹿素行が自ら手を加えて手直したと伝えられる。門は桁行4間半、梁行2間、建坪9坪の規模を有していたというのが現在は門・石垣ともに失われ、明治初期に撮影された古写真で往時の姿をうかがえるにすぎない。古写真によれば櫓門は切妻造りであったことがわかる。現在は都市公園となり「かんかん石」と呼ばれる築石の一部が現地に残されている。また門の東には堀に突出した横矢枱形が付設され、門の守りをなしている。

平成14年(2002)に実施した発掘調査によって、二之丸門枱形の石垣の根石が検出され、枱形状の一部が明らかとなった。

⑭ 二之丸庭園

平成10年～平成13年(1998～2001)にかけて全面発掘調査が行われた大名庭園である。庭園は、大石頼母助屋敷南面から二之丸西仕切までに至る大規模な池泉を中心としたもので、屋敷に近い部分では、池底に玉石や板石を敷き詰め、上水道の水が注ぐ流れの池泉であるのに対し、南西に広がる部分は水深も深く船遊びができる雄大な空間をなしていた。この二之丸庭園については、赤穂に配流されていた

山鹿素行が自身の日記に、茶亭での茶事に招かれたり、「錦帯池」と呼ぶ池泉で船遊びなどの歓待を受けたことを記している。平成14年(2002)9月20日、本丸庭園とともに「旧赤穂城庭園」として国の名勝に指定された。現在は、大石頼母助屋敷に近い流れの池泉周辺が復元整備され、発掘調査によって検出された東屋を整備するとともに、池底に堆積していた土から見つかった花粉の分析などから判明した樹木を植栽して当時の景観を再現している。

⑮二之丸庭園表門

二之丸庭園の南東隅角にあたり、発掘調査では後世の削平により遺構は失われていたが、古絵図等の資料から門が存在したことが判明した。庭園への表門として、平成20年(2008)3月に脇戸付きの冠木門が整備された。



⑮二之丸庭園表門

⑯大石頼母助屋敷跡

二之丸門を入ると右手には大石頼母助屋敷があった。大石頼母助良重は^{しげ おおいしくらのすけよし}大石内蔵助良雄の^{おお おじ}実の大叔父に当たる人物で、とくに藩主長直に重用され赤穂においては二之丸に屋敷を賜った。山鹿素行が赤穂に配流された際、素行はこの大石頼母助の屋敷の一角で8年余りの^{たつきよ}謫居生活を過ごした。発掘調査では、頼母助屋敷の土塀基礎石列、建物礎石群、上水道遺構などが検出された。平成21年(2009)3月に発掘遺構に基づいて薬医門形式の屋敷門が復元された。



⑯大石頼母助屋敷門

⑰北隅櫓台

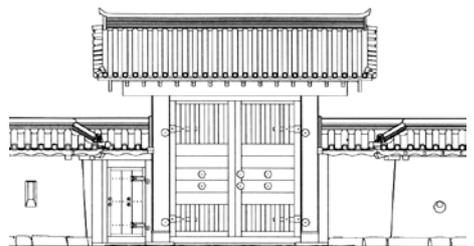
二之丸門の北西部に位置し、往時は東西3間半、南北4間半の基礎部を持つ一重櫓が存在した。平成16年(2004)の発掘調査では、この櫓から二之丸庭園下層に伸びる^{まいぼつししがき}埋没石垣が検出された。この調査結果から、櫓台がもとは埋没石垣と同時に築かれたことが判明し、赤穂城の櫓台の中でも古い時期に構築されたことが明らかとなった。平成18年(2006)には櫓台石垣の解体修理が実施された。



⑰北隅櫓台

⑱西中門跡

二之丸の西側に位置し、三之丸へ開口した門である。間口2間余り、建坪6坪の規模と伝えられ、平常は番人もなく閉ざされていたという。発掘調査によって、門から三之丸へは^{どぼし}土橋でつながり、その部分で二之丸外堀が途切れていたことが判明した。さらに土橋は門跡に対して約2.4m南にずれて取り付けいていたことも明らかとなった。



⑱西仕切門 (計画図)

⑲西仕切と西仕切門

西仕切は二之丸を南北に二分する城壁で、低石垣の上に土塀が巡らされていたことが絵図や発掘調査から明らかとなっている。西仕切の途中には^{にししきり}西仕切門という小門があり、発掘調査の結果、^{ひかえしら}控柱付きの^{むな}棟門であったことが判明した。この西仕切門は「透シ門」とも呼ばれていることから、門扉の一部に横板を張らない構造であったことがうかがえる。平成21～22年(2009～2010)に復元整備が計画されている。

⑳花見広場 (元禄桜苑)

二之丸南西部にあり、古絵図等には何も描かれていない部分であったが、発掘調査によって池泉などが見つかった。この池泉には、本丸堀の^{よすい}余水が流れ込み、さらに池泉から城外へ排水される仕組みとなっていた。現在は池泉の復元がなされ、周囲には元禄期のサクラの品種など18種200本余りが植えられ、市民の憩いの場となっている。



⑳花見広場 (元禄桜苑)



②①米蔵跡休憩所

②①米蔵跡休憩所

水手門の内側には米蔵・番所があり、水手門から荷揚げされた米などの物資はここに収められた。発掘調査では長大な米蔵の遺構が検出され、現在はその位置に米蔵を模した休憩所が整備されている。休憩所の内部には、米俵などの荷物が壁に触れて傷まないように壁に埋め込まれた「荷ずり木」を再現して、外観同様に米蔵の雰囲気を感じることができるようにしている。



②②水手門跡と周辺石垣

②②水手門跡

二之丸の南端に位置し、海もしくは干潟^{ひがた}に面した門で、間口1丈、高さ2間余り、建坪4坪の規模を持っていたという。現在も門の礎石が原位置に残されている。門の周囲は船の出入りのため城壁を大きく内側に引き込んだ水撚^{みずひねり}の縄張となり、その城壁は緩やかな曲線を描いて西方の南沖櫓台^{みなみおきやぐらだい}へとつながっていることが特徴的である。門の前面には船着きの雁木^{がんぎ}が設けられ、さらに波よけの突堤が城壁から突出していた。この雁木と突堤は平成10年(1998)に発掘調査及び復元整備が行われた。



②③南沖櫓台

②③南沖櫓台

水手門から西側に延びる曲面を描く城壁の先に位置する二重櫓で、その基底は東西4間2尺、南北3間4尺の規模を持っていたというが、この櫓も現在は櫓台の石垣を残すのみである。



②⑥二之丸東北隅櫓台

②④潮見櫓台

潮見櫓と呼ばれたこの櫓は、二之丸東南隅に位置し、基底が東西3間5尺、南北4間2尺の規模をもつ二重櫓であったが、今は櫓台の石垣のみが残されている。南沖櫓とともに海上監視のための櫓で、城南面の守りを固めている。

②⑤東仕切門跡

本丸天守台東側の堀に接して東仕切の石垣があり、これに小門が東に面して設けられていたという。この東仕切門の北側には作事小屋^{さくじ}が、南側には馬場があった。現在は仕切石垣・門跡ともにすべて埋没しており、今後の発掘調査による解明が望まれる。

②⑥二之丸東北隅櫓台

二之丸の東北隅角、清水門の南に位置する二重櫓で、基底は東西3間半、南北4間1尺の規模を持っていたという。櫓台の石垣は明治25年(1892)に洪水の災害復旧時の資材として持ち去られて大半は失われたが、平成8年(1996)に櫓台石垣が復元された。



②⑦二之丸外堀

②⑦二之丸外堀

二之丸と三之丸を区画する部分に設けられた堀で、東は清水門側で熊見川(千種川)^{くまみがわ}に、西は西中門の先で海に開放し、それぞれの開放部には柵状の施設を設けて船や漂流物の進入を防いでいた。また二之丸門・西中門の前面では土橋が堀を分断しているため、二之丸の外堀は不連続な堀となっていた。

②⑧大手門

大手門の虎口は内枘形をなし、東面する高麗門と南面する櫓門から構成される雄大な城門であった。明治初期に二つの門は失われたが、昭和30(1955)年に高麗門のみが大手隅櫓とともに赤穂城復興義士尊像奉獻奉賛会によって再建された。

⑳大手隅櫓

大手門の北にある二重櫓で、東西4間半、南北3間半の基底部を持つ二重櫓である。大手門を監視する到着櫓としての性格を持ち大手門防備の要となる櫓である。明治初期に取り壊されたが、現在は大手門や土堀とともに再建されている。



㉔大手門と㉔大手隅櫓

㉑大手門枅形と番所跡休憩所

大手門枅形は、高麗門を通過し右に折れて櫓門をくぐると、古絵図によれば正面には番所と灯籠があった。さらに枅形裏手は広い武者溜まりとなり、その一角には上水道の汲み出し枅が備えられていた。枅形石垣は、廃城後の明治19年(1886)に城内への出入りの便宜を図るため、櫓門があった部分を石垣により閉鎖し、新たに南側を開削するという改変がなされた。平成11～14年度(1999～2002)にかけて枅形周辺の土地の公有化と発掘調査を行うとともに、枅形石垣を旧状に復して往時の動線を復元し、番所跡休憩所等の整備を行った。



㉑大手門枅形と番所跡休憩所

㉒近藤源八宅跡長屋門

赤穂城の設計を担当した近藤三郎左衛門正純の子、近藤源八正憲こんどうげんぱちまさのりの屋敷の長屋門である。近藤源八は父の跡を継いで甲州流軍学を修め、浅野家の軍師ぐんしとして1000石番頭ばんがしらの重職にあった。その屋敷は間口33間、奥行31間もの広大なものであったという。屋敷跡には道路に面して長屋門のおよそ三分の一が残されており、平成10年(1998)4月に赤穂市指定文化財に指定され、その後復元整備が行われた。現在は、土日・祝日に建物内部の公開が行われている。



㉒近藤源八宅跡長屋門

㉓大石良雄宅跡長屋門

大石家は代々浅野家に仕えた重臣で、赤穂入封から断絶まで家老として大手門西側の一面に屋敷地を構えていた。屋敷地は間口28間、奥行45間余りの広さを誇り、庭には池泉も造られていた。屋敷地は「大石良雄宅跡」として大正12年(1923)3月7日に国史跡として指定されている。現在、屋敷跡は大石神社境内となっているが、道路に面して長屋門が残されている。この長屋門は城内に残る数少ない江戸時代建築のひとつで、昭和54年(1979)には解体修理が行われた。ちなみに、元禄14年(1701)の刃傷事件を知らせる早籠はやかごが叩いたのがこの門である。



㉓大石良雄宅跡長屋門

㉔三之丸東隅櫓台

清水門の北方、大手門との間の城壁が鈍角に折れる隅角部にある櫓台で、往時は東西3間5尺、南北4間1尺の基底部をもつ二重櫓が存在していた。櫓台上には自然石を用いた隅櫓の礎石が残されている。

㉕清水門跡

「川口門」とも呼ばれた清水門は、刃傷事件後の赤穂城明け渡しの際、大石内蔵助が最後に城と惜別した舞台として知られる門である。門外には熊見川沿いに米蔵・葉煙場・番所などがあり、米蔵の一部は昭和61年(1985)に発掘調査された。この米蔵のあった場所には現在赤穂市立歴史博物館がある。平成3年(1991)には門前面の橋石垣の発掘調査と復元整備が行われた。



㉕清水門跡

㉖武家屋敷公園

清水門の西側に位置し、浅野時代には坂田式右衛門さかたしきえもんの屋敷があった。昭和58年(1983)に門と瓦葺き土堀を復元し、内部は部屋の間取り



③⑤ 武家屋敷公園



③⑦ 干潟門跡・西南隅櫓台



③⑧ 塩屋門跡



④① 三之丸外堀



④② 三之丸石垣の屏風折

表現を行ったほか、井戸屋形や四阿などを設けている。また屋敷地の植栽には当時の侍屋敷の生活をしのばせる花木や薬草類なども植えられ、往時の侍屋敷の景観を再現している。

③⑥ 船入跡

熊見川に開口した船入で、昭和 59～61 年(1984～1986)にその一部が発掘調査された。調査によれば、船入の入り口は間口 5.27m (3 間)、内部は入り口から奥に扇形に広がり、その護岸は高さ 2.5m の石垣となつて、棧橋状の突堤も備え付けられていた。また、船入の南には一重櫓があつたが、現在は櫓台石垣のみが残されている。

③⑦ 干潟門跡・西南隅櫓台

三之丸の南端、城外に広がる干潟に面した門で、古絵図によれば高麗門であつたと思われる。門の内側には葺土居が存在したようであるが、既に破壊されたためか発掘調査では確認できなかった。また干潟門西方の城壁隅角には西南隅櫓台があり、往時は東西 3 間半、南北 4 間 1 尺 5 寸の基底部を持つ二重櫓が存在した。

③⑧ 塩屋門跡

搦手となる塩屋門は枡形と高麗門から構成されていた。枡形内には太鼓櫓があり、塩屋門の外に展開する侍屋敷に向け合図を発したという。枡形石垣は現在もよく残り、枡形内部の雁木坂や枡形外面の複雑な石垣の折れなど特徴ある構造を今も見る事ができる。

③⑨ 西隅櫓台

塩屋門の南にある櫓台で、往時は東西 3 間半、南北 4 間半の基底部を持つ二重櫓が存在した。また現在は失われているが、この櫓台から沼と侍屋敷を画する土手が南西方向に延びており、櫓台裾付近には三之丸外堀の水量調節の水門が設けられていた。

④① 樋門

二之丸外堀の水量調節の樋門で、三之丸城壁の石垣面に開口している。水は堀から溝によって導かれ、城壁の下を通りこの樋門から城外へ排出された。樋門の石材には「延享三年寅五月」の銘が見られる。延享 2 年(1745)の『播磨国赤穂城石垣崩并樋損候覚』という絵図に樋門修理の記事が書き込まれており、その年号から判断してこの樋門の修理記録と思われる。この絵図によれば、樋の寸法は長さ 5 間 4 尺、高さ 1 尺 5 寸、幅 2 尺 5 寸であつたことがわかる。

④② 三之丸外堀

三之丸と城下の上に設けられた堀で、清水門から塩屋門西までの間に巡っていた。廃城後は田畑となつたが、順次復元されたものの、塩屋門周辺は区画整理により道路や宅地となり埋められている。その一部については、発掘調査によって護岸石垣が検出されており、現在はモニュメント公園が整備され、往時の堀幅を表示している。埋没した堀部分については、昭和 46 年の史跡指定時には、指定範囲から除外されていたが、平成 15 年 8 月 27 日に史跡の追加指定を受けた。

④③ 三之丸石垣の屏風折

三之丸北西部に見られる横矢の一つで、真っ直ぐな石垣の途中を短く折ることによって突出部をつくりだし、その形から屏風折とも言われる。往時は石垣の上に土堀が巡らされていた。

発行 平成 21 年 3 月 31 日
編集 赤穂市教育委員会 生涯学習課 文化財係
〒 678-0292 赤穂市加里屋 81 番地
TEL 0791-43-6962 FAX 0791-43-6895